第1回徳洲会看護研究発表会

# 84演題の成果共有し質向上へ

徳洲会看護部門が開催

徳洲会看護部門は8月22日、湘南鎌倉医療大学（神奈川県）を会場に「第1回徳洲会看護研究発表会」を開催した。テーマは「未来を支える看護の探求～徳洲会グループの連携と共創～」。日々の看護実践から得られた成果をグループ全体で共有し、グループのスケールメリットを生かした連携と共創を図ることで、看護の質向上と未来の看護を支える力を創出するのが目的。全国の徳洲会グループ病院から84演題（特別演題1演題、口演46演題、ポスター37演題）の発表があり、当日は会場を4つに分けて学会形式で行った。

## 徳洲会グループ看護師330人参集



第1会場（口演会場）の様子



第3会場（ポスター会場）の様子



1年以上の準備期間を共にした運営スタッフら

開会式で一般社団法人徳洲会の八木沼正子・看護部門本部長は、全国から集まった330人超の参加者や会場を提供した大学に感謝を表したうえで、「少子高齢化のなかで、看護の力が多くのことを変えていけると、現場のなかで感じているのではないでしょうか。今回は現場から生まれた成果を共有できることをうれしく思います」と強調。“業務改善発表”から“看護研究発表”へと形を変えて初開催したことに触れ、「日々の仕事で積み重ねているデータを活用し、看護の質向上につなげてください」と発表会の意義をアピールした。

その後、参加者は口演2会場、ポスター2会場に分かれ、興味のある演題発表が行われる会場を巡りながら研鑽した。演題は「感染・安全管理」、「退院支援・地域連携」、「教育・人材育成」、「業務改善・DX」、「看護実践・ケア」といった多岐にわたるテーマで構成、グループ病院から日頃の取り組みが集結した。

口演会場では、満席の客席から次々と手が上がり、熱気あふれる議論を展開。ポスター会場でも、発表者の周囲に参加者が密度の高い輪をつくり、実践の工夫や課題について熱心に質問を投げかける姿が見られた。

また、第1会場で実施した特別演題では、診療看護師特定看護師委員会の野津花子・山形徳洲会病院看護副主任（診療看護師）が「特定行為研修修了者の活動に関連する要因の検討：多施設横断研究」と題し発表。グループ内の特定行為研修修了者を対象とした調査結果をもとに、月1回以上の特定行為実践の有無に影響を与える要因を分析。個人的要因よりも、病棟横断的な活動の有無や所属部署といった組織的要因が強く関連していることを示し、修了者が十分な力を発揮するための組織的な環境整備やマネジメントの重要性を訴えた。

閉会式では、まず有田清子・湘南鎌倉医療大学学部長が「現場の困りごとがそのまま研究の問いになっており、深い印象を受けました。今後は施設を超えた共同研究が生まれることを期待しています」と評価。続いて、山上美恵子・介護事業部看護・介護部長は「業務改善から始まった発表会が、真の看護研究へと深化してきたことをうれしく思います。現場の努力が実を結んでいます」と振り返った。

倉掛真理子・業務部長は「身体的拘束の低減など、各施設が業務改善に真摯に取り組んできた成果を実感しました。この取り組みを続けてください」と継続の重要性を指摘。坂本眞起代・総務・人事部長は「長年の教育の積み重ねが今回の成功につながりました。グループのビッグデータをもとに、外部に対しても積極的に発信していきましょう」と期待を寄せた。

八木沼本部長は「徳洲会グループは現在、年間約1,700万人もの患者さんを診ています。これほど多くの患者さんに医療・看護を提供している実績と自負をもち、そのビッグデータを活用して自分たちの看護を形にしていってください」とエール。

最後に、照屋いずみ教育部長が「施設の枠を超えて知識や経験を共有し、互いに学び合うことこそが徳洲会グループの強みです。本日得た学びをそれぞれの現場にもち帰り、明日からの看護実践に生かしてください」と締めくくり、閉会した。

日本顎顔面インプラント学会誌

## 長・東京西病院医長の論文 難症例への長期予後が掲載



「臨床の知見を論文として形に残すことは重要」と長医長

東京西徳洲会病院の長太一・歯科口腔外科医長が執筆した「下顎前突症を伴う上顎多数歯欠損に対して外科的矯正治療およびインプラント治療を行った1例」と題する論文が、日本顎顔面インプラント学会誌に掲載された。

同症例は、骨格性の下顎前突に多数の歯の欠損が重なった難症例。咬合の基準となる歯がほとんど存在しない状態であったため、補綴専門医と密に連携を取り、新製した義歯を用いて下顎の移動位置や咬合平面（かみ合わせの高さや位置の基準）を事前に評価・設定した。

その基準のもと、両側下顎枝矢状分割術による骨切り手術を施行して、下顎骨を適正位置へ移動。術前・術後矯正を経て上顎に4本、下顎に1本のインプラントを埋入し、固定性補綴装置を装着。上顎固定性装置の装着から約9年が経過した現在も、良好な咬合状態と高い咀嚼機能性を維持している。

長医長は「かみ合わせがない状態から位置をどうつくるか試行錯誤を重ねました。長期的予後を含めて学会に評価されたことは非常にありがたいです。臨床の知見を論文として形に残すことはきわめて重要だと考えます。後進の指導も含め、今後も臨床と研究を両立させていきたいです」と意欲的だ。

看護学生への指導スキル学ぶ

湘南鎌倉医療大学 実習指導者講習会

湘南鎌倉医療大学（神奈川県）は8月4日、2026年度実習指導者講習会の開講式を行った。同講習会は看護学生に対する実習指導者（予定者を含む）が、効果的な実習指導を行うことができるよう必要な知識・技術を習得することが目的。カリキュラムは14科目にわたり、11月6日の最終講義まで総授業時間は190時間に及ぶ。

同大学では20年度から同講習会を実施しており、22年度からは厚生労働省認定の講習会として運営。これにより徳洲会グループ外の医療機関などに所属する実習指導者も受講可能となった。今年度はグループ内外から40人の看護師が受講。

開講式では、名前を読み上げられた受講者一人ひとりが力強く返事を行い、意欲の高さが伺えた。続いて荒賀直子学長が「社会状況の変化とともに看護教育の内容も変化してきていますが、対人サービスの仕事では、基本となる大切なことは変わらないと思います。ぜひ実習のなかで看護という仕事の素晴らしさを伝えながら指導していただけるとうれしいです」と呼びかけた。



「看護という仕事の素晴らしさを伝えながら指導してほしい」と荒賀学長

同大学を運営する学校法人徳洲会の福島安義理事長（医療法人徳洲会最高顧問）は「学生たちにとっては、実習現場での経験や指導内容が占めるウェイトが大きく、看護観を養っていく重要な時期となります。この講習会を通じて得たことなどを生かしながら、学生たちにしっかりと向き合っていただけたらと思います」とエールを送った。

開講式の終了後、出席確認の方法や図書館など学内施設の利用方法の案内、キャンパス見学などオリエンテーションを実施。続けて、「看護理論」の講義を行った。

同講習会責任者の小森直美・看護学部看護学科教授は「実習指導者の方々には、看護実践の現場での患者さんなどとのコミュニケーションの取り方や、それぞれの看護観、また、教科書では教えることのできない“心のこもった看護”を臨床で伝えていただければと考えています」と期待を寄せていた。

湘南鎌倉病院

## 子どもの成長と交流が目的 建長寺合宿で救護班を担う

湘南鎌倉総合病院（神奈川県）は8月20日、建長寺を舞台に行われた「鎌倉てらこや」主催の合宿で、救護班を務めた。同イベントは地域の子どもたちの交流と成長を目的とした2泊3日の合宿で、小・中学生約80人、大学生約100人が参加。



開会式に駆け付け参加した子どもたちにエールを送る小林院長

開会式には、同院の小林修三院長も駆け付け、「世のため人のため、困っている人を助けること、そして助けられた思いを、またどなたかに返すこと、こういった循環の大切さをいろいろなことから学んでください」と挨拶。また、救護班として参加した水落隆聖・救急救命士と廣海聡・救急救命士は「我慢をしない、無理をしない、異変を感じたらすぐに知らせること、この3つを守って事故なく楽しみましょう」と呼びかけた。



熱中症予防を呼びかける水落・救急救命士（左）と廣・救急救命士

水落・救急救命士は「病院を離れた状況であっても、何かあった時は冷静に対応して活動を支えたいという気持ちで取り組みました」、廣・救急救命士は「当院は救急搬送の多い病院ですので、ふだんから培ってきた知識や技術を、合宿に参加する子どもたちに、しっかり還元したいと考えました」と意欲を見せていた。

## マタニティ坐禅が好評博す 建長寺に延べ500人超参加

湘南鎌倉総合病院が開催しているマタニティ坐禅が好評だ。これは、同院が2017年から建長寺で定期的に開いている坐禅会。生後10カ月までの赤ちゃんとその父母が参加可能で、延べ500人以上が参加している。



初開催から10年目を迎え、ますます好評のマタニティ坐禅

坐禅は心や呼吸を整え、心身を深くリラックスさせる修行法。助産ケアの一環として、建長寺という特別な場所で坐禅体験を行い、妊婦さんや産後の母親と助産師が時間を共有することで、出産準備や産後のメンタルケアに好影響が期待できるため継続している。

6月22日には29回目のマタニティ坐禅を開催。5人の赤ちゃんを含む20人が参加し、同院の桐谷佳耶助産師らが引率。境内にある應眞閣（大庫裡）で、はじめに同寺教学部の伊東良禅和尚が座り方や姿勢、呼吸法など指導したうえで、10～15分間の坐禅を3セット行った。静寂のなか、微動だにしない妊婦の方々や、母親の周りでハイハイする赤ちゃん、わが子を気にかけながらも坐禅に集中する母親の姿が見られ、時折、警策（修行者の肩を打つ板状の棒）の音が畳敷きの大広間に響いた。

終了後、双子を帝王切開で出産したという母親は「産前にも参加しました。帝王切開は怖かったですが、坐禅体験で得たことを思い出すことで、恐怖心が和らぐなど分娩中とても役に立った実感があります」と笑顔。